資料紹介

御会和歌　永和四年八月十五夜

二種の歌会を収める写本で歌会の催行は永和四年（一三七八）八月十五夜、写はそれから間もない九月十九日である。

二種の八月十五夜会の中、主な方は、月出山等三首歌会、『愚管記』に記事があり、次の如くである。

今夜御会、関白・御子左中納言・兵部卿・園前宰相公卿四人云々、半夜被下勅書、非差事、有懐紙者可進之由被仰下、令申入不及愚案之由了、

この会では懐紙に書いているのであって、この書の、御製・二位局・忠基・為遠迄の四人はその懐紙の書き様のまゝ写されたものと思われる。二位局のみ少々書き方は異なるが、四人共、５７／５７／７の区切り方をされており、末の句も、漢字交りの為、字数は定まらないが別行である。長綱・基光・親雅・基明・実信・資教の六人は二行書きで上句下句の分かち書きである。和歌会の標示（端作）も、御製は「詠三首和哥」、二位局は歌会標示歌題共になし、忠基「八月十五夜詠三首和歌」、為遠「八月十五夜同詠三首和歌」と、それぞれ異なり、もとの懐紙に書かれていたまゝと思われる。歌会標示に関しても、以下の六人は「八月――」の形であり、如何にも省略して記している感がある。残存する二条為氏の三首懐紙の三首目は二行五字であるが、永正十六年（一五一九）九月二十四日月次和歌御会における上冷泉為和の三首懐紙はこの書と同様の書かれ方である。むしろ珍らしいと思われるのは女歌の懐紙の方で、「女は名ばかりをかくべし」（竹園抄）、「女房懐紙は端作も題も書事なし、ただ歌ばかり書なり」（井蛙抄）、「女子懐紙をかくには下をばあけぬ事也、上をばいかにもあけたるがよきなり」（清巌茶話）「木立のちらし書也」（懐紙夜鶴抄）といった主張そのまゝの、散らし書きで書かれている。この時代和歌の書き方はかなり故実化されて来ているのである。永和三年三月四日には宮中御会始が行われ、『愚管記』に「雅氏雅家朝臣子、今夜初参也」とある。雅氏は後の雅縁で、『後愚昧記』によると、和歌書様は『袋草紙』以来の三行三字であり、雅氏のみは三行五字で「非常儀歟、若為家説歟」とある。しかし、これは一首懐紙での話であろう。

後半の短冊類の写しも原型そのまゝを写しており、無署名のものは天皇のものと推定される。この書は、又写しとしては訂正が多すぎるので、恐らく懐紙・短冊を脇に置いての写しであろう。作者別歌数は、御

製5、為遠5、忠基4、長綱2、親雅1、基光1、資教1、基明1である。歌数から言っても、これがこの歌会での総ての詠であろう。この近辺で著明なのは同年九月十三夜の十三首題歌会であるがこれとは別物である。『愚管記』に記事のあるもので、「入夜以仲光朝臣被下十三首短冊先日題也」とあるが、仲光朝臣はこの詠草の詠者中にはない。又新後拾遺和歌集415に次のようにある。

永和四年九月十三夜内裏にて十三首歌講ぜられけるに、

月前虫　　従二位為敦

露はまだむすびもかへぬ月かげを草葉の霜と虫や鳴くらん

この為敦も詠者中にはないものである。歌の出入はともかく、詠者の名のあがる者二名が居ない事は、この十三首会ではなく、全二十首の体裁もそれを示すものであろう。八月十五夜の出詠者は十名であるがその十名の中実信・二位局を省いて八名がこの短冊の会と重なる。二位局も無署名の中にあるとすれば、九名重なる事となる。体裁も明らかに短冊を写しており、他の日の催行のものとも考えられるが、その日の直会の会のものではないかと思われる。二十首総て「月前—」題で統一されている点や、書写が同年の九月十九日である点も、或は九月十三夜のものとも考えられるが、題の上で八月十五夜でもよい点、又、この書が標題に「和歌御会　永和四年八月十五日」と題され、全体が一筆一書の体裁をなしている点から考えても、同日のものとした方がよいのではないかと思われる。新後拾遺1134に次の後円融天皇の歌がある。

永和四年八月十五夜、三首歌講ぜられし次に、

月前別恋　　太上天皇

つらき名のたぐひまでやはかこつべき別れし袖の有明の月

この歌は、この当座歌会の「月前別」として無署名で載っている歌であり、詞書きの「次に」に注目すればこの日の当座歌会と認定してよかろう。この会の歌題は恋ではないが、半数程は歌題末に「—恋」を付してもおかしくない内容である。しかし、当座には「—恋」はなく、勅撰に入集するに際し、歌題に恋を付したものであろう。猶、この歌は、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究南北朝期』七五三頁に「月出山等三首歌会、（中略）天皇の歌が新後拾遺一一三四にみえる」とある。この書き方だと、三首歌会の歌題の一つに「月前別恋」があるかのように解されるが、改訂新版の方ではこの書の紹介が補注でなされている。

歌の内容は総て二条家風で、特に論ずるに能わない。

○

御製は後円融天皇、二位局については後述、忠基は関白九条忠基、永和元年十二月廿七日詔為関白、同二年正月六日従一位、同四年八月廿七日辞左大臣、為遠は御子左、当時は権中納言、同年八月廿七日に権大納言に任ぜられている。長綱は東坊城、永和元年十月二日任兵部卿去弁、永和三年三月廿六日兼式部権大輔のまゝである。基光は園、永和四年八月十七日右衛門督に任じているが当時前参議である。『愚管記』にある公卿四人とはこゝ迄であるが、本書の書き手は、長綱以降は懐紙の書式

通りには写していない。長綱は非参議従二位、基光は従三位である。親雅は中山、当時、左近衛権中将である。基明は園、基光の弟で、同夜の御会の講師になっている。親雅と基明は康暦元年（一三七九）閏四月二日、義満により召名を止められ、基明は出家、親雅は九条の敷地を抑えられる。実信は応永二年六月三日任参議、右中将如元、左大臣洞院公定公猶子とする人物か。公定息の筆頭にあるが、『尊卑分脈』に「実者忠季卿子、応永十九年十一月廿六日薨、一書五十六」と記す。洞院庶流正親町忠季の子、従って洞院家では嫡宗ではない。勅撰作者ではなく、和歌会にも顔を出す事は珍らしくこの当座歌会の方には入って居ない。資教は日野、永和年間に入ってからすぐに和歌世界に活躍する。上皇の喪があけた永和元年三月二十三日夜宮中歌会を奉行する。「この会を契機にしたかの如くに歌壇は活発化する」と井上宗雄氏は書いておられる。応永九年（一四〇二）三月廿八日権大納言を辞したが、これが極官で、応永十二年十一月従一位に叙せられると共に出家している。応永卅二年四月廿七日准大臣に宣下され、新続古今で儀同三司と記されるのはその為である。時光と二位局は兄妹であるがその時光の次子と目され、多くの当時の歌会に出詠、自邸でも和歌会を催し漢詩にも長じていた。十人の出詠者の中、勅撰作者でないのは基光と実信のみである。

「二位殿局」とあるのは、大納言日野資名女の、典侍宣子と推定される。新後拾遺では従一位宣子として六首入集し、女性としては最多数を占めるが、次いで五首入集の女性が三人居り、際立ったものではない。最後の勅撰集新続古今では、二首入集している。貞治六年（一三六七）頃三品局、三位局として名が見え、『後愚昧記』応安三年（一三七〇）三月四日条には二品宣子とあり、応安七年（一三七四）、後光厳上皇の崩御によって出家、従ってこの歌会催行の頃は二品尼と記録に記されている。永和初年頃、当時禁裏の典侍を勤めていた姪に当る日野時光女業子を足利義満の室に入れた人物である。『後愚昧記』永和三年正月十二日条に次のようにある。

今日申剋許大樹妾故時光卿女、資教妹、一腹也、元年来官仕禁裏、号新典侍、而為二品尼計略遣武家了、大樹寵愛之産女子、

「二品尼計略」とある。当時の威勢を知るべきである。『愚管記』永徳元年（一三八一）三月十六日条に義満義母渋川幸子とともに従一位に叙せられたとあり、その後岡松一品（尼）と称したらしい。当時の女性として一品（従一位）に女叙される事は多くなく、宣子の地位が重かった事を示す。この人の姉妹に『竹向が記』の作者名子がいる。新後拾遺集は巻六迄の四季部は永徳二年（一三八二）三月奏覧。従って作者の官位は、ほゞその年月に統一されている。巻七以後は永徳三年冬に揃えられていて、巻六迄の作者表記とは異にし勅撰集としては異例であるが、正保四版本200の歌を「百首哥奉し時　従三位宣子」とするのは誤りである。

書誌について記す。表紙・本文共紙で楮、仮袋綴一冊、縦二六・七糎、横二二・二糎。墨付一〇枚（含表表紙）、後半白紙七枚（含裏表紙）。当部函架番号、五〇九―一〇一。表紙は「和歌御会□和四年八月十五日」、奥書は「永和四年九月十□(九)日書写了」

凡例

一、使用漢字は原則的に原文のまゝとした。

一、写本ではあるが、原本の位置をそのまゝ写していると目される箇所が多いので、文字配りはそのまゝとした。

一、半丁毎に」を入れ、（一オ）（一ウ）と丁数を記入した。

一、不明文字は□とし、推定される場合は右に（　）で注した。

（八嶌正治）

詠三首和歌

月出山

こよひとやてるつきなみも
みねこえてもなかにかゝる
すゑのまつやま

野外月

□分せしおのゝしのはら」（一オ）
□（し）ほれてもおなしやとりと
月やすむらむ

寄月恋

とへかしなよそのそらゆく
つたにもぬれ（きたにも）□ぬるれは袖と
うつるならひを

二位殿局

雲のうへにすみまさるへき
行すゑの光しらるゝ」（一ウ）

山のはの月

もゝ草の色にた□しも
うつれはや野へをやとりと

月はすむらん

いまさらにたれにつけまし
夜よしとて月にも

人を

まつ身ならねは」（二オ）

八月十五夜詠三首　和歌

関白忠基

月出山

出てたになをそ□たるゝ
山の端に□□くれはてぬ
月のひかり□（は）

野外月

秋くさの花のゝ□ゆの
色〳〵をわかてや□きは」（二ウ）
影やとすらむ

寄月恋

とへかしなまたい□(つ)はりは
つもるとも今夜も中の
月□しるへ□(く)

八月十五夜同詠三首和歌

権中納言藤原為遠

月出山

□ねてよりはらひはてたる」(三オ)
□(山)かせに雲もいとはす
いつ□(る)月かけ

野外月

こよひとて野辺のちくさの
かすま□(と)□そへぬはかり
すめる月かな

寄月恋

月にねぬならひ□しりて
□けぬとやこよ□(ひ)ちきるを」(三ウ)
いそかさ(る)らむ

八月――――

兵部卿菅原長繩(マヽ)

山のはを□(て)□そ□るより月はれて
こよひ名□□そしらるゝ
秋はなをもとの□□ろやうかふらむ
野中の水にやとる月影
人をのみしけき木のまをもる月の
□にかせましこゝろつくしを」(四オ)

八月――――

従三位藤原基光

やまのはをいてそむるより雲のうへに
すむかけしるき□(あ)きの夜の月
おく露もかきりはしらぬむさし野ゝ
草葉をしなみ月やすむらん
ふけぬとてうらみ□はてし夜とゝもに
□見んまてのちきりなりせは」(四ウ)

八月――――

左近衛権中将藤原親雅

くれはてゝいつるおのへのつきかけそ
のほりもあへすやかてさやけき
すむ月そひかりをちらす花すゝき
袖ふる野への露にやとりて
いつはりのことの葉にたになくさめよ
くも□てしは(月や)ししはしみゆると
八月――――」(五オ)

右近衛権中将藤原基明
はらふへき雲はのこらてすみのほる
月にのみ吹秋の山かせ
名にしほふらちもおなし影なから
すまはうへ野とすめる月かな
いかゝせむとはぬはかりのとかならて
かこては月もくもるなみたを
八月――――
左近衛権中将藤原実信」(五ウ)
いつよりもひかりそしるき秋はいま
名もたかさこの山のはの月
またしらぬおとろのみちの行すゑを
まよはてゝらせ春日野の月
とへかしと人□やおもふいたつらに
まつとて月の影そふけぬる
八月――――
蔵人頭権右中弁藤原資教」(六オ)
□(お)きてけに雲も名におふ夜はそとは
みせてやたてぬ山のはの月
秋はきの花のにすめる月かけは
ひとつにうつるつゆやをくらむ
こぬ夜そと又やかそえん我袖に
てる月なみの影をやとして」(六ウ)
永和四年八月十五夜和歌御会
題者　御子左中納言
講師　基明朝臣
読師　御子左中納言
御製講師　御子左中納言
読師　関白」(七オ)
月前雲　いとはるゝ身はうき雲のき□(え)わひて
さそはぬ月に猶かゝりつゝ
月前風　むら雲をはらふもしるし月かけに
たえ〳〵わたる夜半の秋かせ　為遠
月前露　秋かせのは□(ら)ひもあへぬ夕つゆに
やとれる月の影そみたるゝ　忠基
月前河　みなの川つもれる水のそこまても
みえよとすめる夜はの月かけ　親雅
月前浦　なにはかたあし間に見えし月影や
はやこと浦に曙(マヽ)わたるらむ　忠基
月前関　あくるまもしはしやすらへもち月の
くもらぬ秋にあふさかのせき」(七ウ)
月前荻　おきの葉のをとはかりかときく程に

かけもあきなる夜はの月哉　為遠

月前萩　萩の戸にやとるもしるく夜半の月
あけ行までと影そうつろふ　基光

月前薄　しろたへにみゆるそゆかしき初小花
やとかる月を袖にまかへて　資教

月前雁　こよひ□□(と)(は)けにふ□くもにとふかりの
かすさへ月のもなか□(な)りけり

月前鹿　秋かせのふけゆへ月にさ夜ころも
妻恋わひて鹿そなくなる　長綱

月前虫　月にのみうらみなれしやきり〳〵す
あくるもわかぬねをはなくらん為遠」(八オ)

月前契　こよひたに空たのめそとかこつ哉
月のとかなき契なれとも　為遠

月前別　つらき名のたくひまてやはかこつへき
わかれし袖のありあけの月

月前恨　みるまゝにわかなみ□(た)ゆへくもるとも
しらてや月を猶□□(か)(こ)たまし　基明

月前旅　たひなれぬ心のあきは猶そうき
月の夜ころと思なせとも　忠基

月前鏡　なかはさへすくる名残のますかゝみ
月にや秋のうつり行らん　忠基

月前衣　うつおとはいそくよさむの月なから
またおく霜やあまのさころも」(八ウ)

月前糸　かたいとのあけかたき夜の月かけも
なかられとのみいましたふ哉　為遠

月前祝　さそなけに光を四方にあふくらん
あきらけき世の雲の上の月　長綱

永和四年九月十□(九)日書写了」(九オ)